

スパイス

葉佩九龍は、じっと皆守甲太郎を見つめていた。いつものように、アロマをふかしている皆守は、眉をよせた。なんだか、葉佩の視線が獲物を狙っているように見えたからだった。

いったい何なんだと問おうとした瞬間、金属製のパイプが唇から消えていた。

ぼかんとする皆守に対し、得意げに笑った後、葉佩はパイプをくわえた。

「……返せよ」

一時の驚きから立ち直り、皆守はそう要求した。だが、葉佩はにやにやと笑ったまま、パイプをくわえている。いよいよ、皆守の眉間のしわがふかくなった。そして。

「……九ちゃん」

実力行使から、葉佩はこともなく身をかわず。

「何なんだ、オマエは」

「別に」

葉佩は、パイプを唇からはずして笑った。そして、すばやく皆守に近づく。

「……っ……！」

ほんの少し皆守はもがいた。驚きの表現程度だった。ゆっくりと皆守の口中を味わってから、葉佩は身体を離れた。べろりと唇を舐めて問う。

「どっちが美味しい？」

アロマの香りは、と。

「……アロマパイプだ」

というか、香りなんかあるかと言って、皆守はアロマパイプに手を伸ばす。

返せよという言葉に対し、葉佩はアロマパイプを皆守から遠ざけた。